

曲った腰に鎌を差して、真黒い手拭で頬被りをして、其の後姿は、今の八十才以上の老人にも見えた。

子供は着物に股引を履き、着物の襟や袖を見ると汁の落ちたのや、鼻を袖に拭き、襟や袖が黒光りしていた。着替る着物もある筈が無く、母が洗濯に苦労した。

|| マツゲ (町買い) ||

正月近くになって、大抵の農家では「マツゲ」(町へ買い物)に行くと言って買物に行き、呉服屋で反物を買って子供達に着物や足袋をつくって着せた。当時の足袋の文数は八文とか、十文型とかいうのが、足袋の文型であった。

|| 「ケリ」(ゴム靴) ||

学校に通う生徒は大抵の人は、藁靴を履いて通学したが、ゴム靴が流行ってからは、ゴム製で通学する様になったが、昔はゴム靴を「ケリ」と言った。

昔の子供達の被り物は、大抵の子供は無帽にちかく、冬の吹雪の日は、「フランケ(毛布の一種)」を被って通学した。

女の生徒は「マント(ツル)」を着て通学したと言う。また服を着ている人は、役場の職員か学校の先生位であった。

|| 「祝日の菓子」 ||

普段着ている衣類も、旦那衆と貧農は差が余りにも違っていた。国の祝日でも、我々貧農の子供は普段着の着物を着て行くが、旦那衆の子供は羽織袴で学校に行く、校長先生が勸語を読んでいる内は頭を下げているが、心の中は早く終って菓子を貰

う事ばかり、心の中にあつた。

|| 「飯ん米」 ||

昔は今と違って足りないのが米であつた。豊作の年でも一反歩から五、六俵が精一杯であつた。その内から約半分の小作米を地主に取られるから、百姓の暮らしは苦しい。

お盆過ぎになると飯米が足り無くなる。子供の七、八人もある家では、飯米が足り無くなるのは当たり前だつた。子供の多い家では十二人、十三人もあつた。

|| 「貧農」 ||

貧農の家では、十二、十三才位で借子に出したり、女の子は「アダコ(子守)」に出したり、口減らしの為だ。

|| 一粒の飯でも粗末になると目が潰れると、よく親が言つたもんだ。一人の老人から聞いた話だが、「貧農の百姓が便所に行ったが、便所の敷板に子供が落としたのか、一粒の飯粒が落ちていたので、親は勿体無いと飯粒を拾って食べたと言う。その翌年から、他家より米が多くとれて、資産家になった」と言う。

|| 「借り子」 ||

私が若い頃に聞いた話であるが、借子を雇って居る家では、借子に五日賄い、七日賄い、賄いとは魚を食べる日で、節約する家では七日賄いで、七日に一回魚を食べさせたが、その魚も粕漬の塩辛い練の切身が半分位であつたと言う。

借り子を雇って居る家では、今日は母の命日、親爺の命日、

孫爺の命日だと、一週間も十日間も魚を食べずに精進、葬事料理をした。魚を食べず節約した。

借子を雇っておる家でも、百姓は仕事の上にも仕事、節約の上に節約しなければ生きて行けなかつた時代であつた。

|| 「スグサ汁」 ||

十一月、十二月頃になると、どこの農家を見ても目につくのは「スグサ(大根の干葉)」で、津軽の風物で、家の軒下のまわりは「スグサ」はなくてはならない保存食で、冬の農家の野菜汁は、朝晩毎日のスグサ汁であつた。スグサ汁に鯛の焼干を入れると美味しく、家によってはトロ口昆布をスグサ汁に入れて食べた。

|| 「自家製味噌」 ||

昔の百姓は自給自足で、味噌・納豆も自家製で、味噌は年に一俵以上も大豆で造り、大樽に入れて三年位手をつけずにいた。金持ちでは大樽(八斗入)を、二個も三個も蔵の中に貯蔵してあつた。

白鮫油などは年に二、三合もあると上に口で、計り売りをしたが、今思い出してみると、一勺枴、三勺枴、五勺枴、一升枴と、嘉瀬鍛冶町の山兵商店で枴売りだつた。

|| 「かまどけす(財産)」 ||

学校から帰ってくると、友達と野原や川の土手に遊びに行き、「スカンパ(さしとり)」や「スグリ(グースベリ)」など、塩もつけず兎の様に食べたが、菓子や飴など買うお金も無く、大

抵の子供がこの様にして食べたが、腹痛や下痢も無かつた。

お昼には汁もなければ魚も無い、漬物だけで、一皿で足りず、二皿も三皿も食べたが、子供が父に汁を飲みたいと言うと、父は昼から汁を飲むなんて、この「かまどけす(財産)」と怒鳴る。

|| 「金持ちと貧農」 ||

昔は村の旦那衆の家は広い屋敷に、大きな立派な家を構え、家の横には白壁の大きな土蔵が有り、家の回りには塀を回し、入口は立派な門構えで、村一、二の金持ちの風格の住居であつた。

農家の屋根は茅葺き藁葺きが多かつたが、どこの屋根を見ても苔が生えていた。貧農の家は敷板を買う金も無く、土間の上に糊殻を敷き、其の上に筵を敷いて暮らしている家も多々あつた。貧農は入口に戸の代りに筵を下げていたが、俗に言う「掛け筵」で、町の人は「軽べつ」の眼で「掛け筵育ち」と笑つた。

|| 「虱と蚤」 ||

一番困つたのは虱と蚤である。蚤は夏が主であるが、虱は年中だ。虱は身体から湧いてくると信じていた。虱は取っても取っても次から次と出てくる。下着の縫い目から列を作つて歩く、冬の寒い晩に寝着物を囲炉裏にあぶると、寝着物にいる虱が熱さの為に囲炉裏にポタポタ落ちた。

春の天気の良い日に庭に筵を敷いて、母が、娘が頭の髪から虱を取っている姿が、時々見受けられたものでした。

「目薬り」

嘉瀬の鍛冶町薬師神社前に湧水があった。この湧水で目を洗うと、悪い目の人も治る。また体の毒を消すとかで、旧暦七月七日は薬師神社の大祭で、村の人々は勿論で、近郷近在の人々が大勢来て、目を洗ったり、湧水を呑む人、また一升徳利に汲んで行く人、水を家に持ち帰ってから目を洗う人々が多々あった。

「ジャンボ刈り」

昔は大抵の家で「バリカン」があった。床屋（理髪店）に行くお金を節約した。

そのバリカンで大人も子供も「ジャンボ」（散髪）刈りをした。父や母に頭を押さえられ刈ってもらったが、切れるバリカンならよいが、大抵の農家では古いバリカンで髪を刈っておるので、途中で髪が引かって痛いとか叫ぶ事が何回もあり、泣き泣き刈ってもらったが、頭を見るとトラ刈り頭だった。

「馬屋」

大百姓の家では馬を飼って居る家もあり、馬屋は家の中にあつたので、夏には「ハイ」や蚊で、昼には馬屋の方から「ハイ」が飛んできて、家の中を飛びまわり、晩には馬屋から蚊が集団で襲い、また馬糞の臭気が鼻を突くが、当時はなんとも思わず、当り前と思つて居た。

「掴み鼻」

昔の百姓は鼻紙を持っている人はいなかった。早く言う「掴

み鼻」である。鼻汁が出てくると掴み鼻をした。残った鼻汁を着物の袖で拭き、着物の袖や襟がピカピカと光っていた。

汚い話であるが、便所に行き、尻を拭くのに、薬を丸めて尻を拭いて済ましたが、家の前にある薬乳穂から薬を抜き、薬をグルグル丸めて尻を拭いた。

往事には便所を「ピンツ」と言ったが、「ピンツ」は便池の訛りであると思うが、お尻のことを「ドンジ」と言った。

「富山の置き薬」

大人でも子供でも病気になることも、医者に行くなど、ほとんど無かった。百姓の家ではお金が無いのである。何処の家でも子供が七、八人もあるのは普通であつたが、余程の旦那衆でなければ医者に行けなかった。

病気になる、医者にかかる高いお金を取られるので、越中富山の置き薬に頼った。何処の家でも二、三の富山の置き薬の袋が柱に下がっていた。

富山の置き薬屋から紙風船や其の他を貰ったが、村ではラヂオや新聞を取って居る家は、旦那衆以外は無く、隣村の事も満足に知る事ができなかった。富山の薬屋から他県の話やら、隣村の話など知らされた。

「お歯黒」

往事には「お歯黒」と言つて、女の人が歯を黒く染めたが、昔は結婚した人と、結婚をしない人の区別だと言う。また歯を染めると虫歯にかからないと言われた。

中世期中柏木地内を通行した 道の跡を探る

原田 萬治

昭和十九年、私が国民学校五年生の頃である。日本が仕掛けた戦争も敗戦色濃く、今思えばいつ敗れてもおかしくない毎日でありながら、一般の国民は、日本は神の国だから、鬼畜米英には絶対最後には勝つのだと教え込まれ、それを信じて窮乏生活を強いられた田舎で、往時の中柏木部落を想い出し、当時の道路のことを思い描いてみた。

太陽が地平線に沈む一時間位前から、部落の中を走る県道三十六号線、この道路の村中を、赤ダンブリ（とんぼ）が群れをなして飛んでいる。道路は子供の遊び場であり、またふれあいの場でもあつた。この道を私達は、大人も含めて往還と呼んでいた。小路にたいして大道の道を往還と呼んだけれいが、がいて道路のことを、ケンドないしはケドと総称していた。

往還とは人の行き来を意味する言葉であろうが、村でも町でも一番交通が激しい道路のことで何かかしら賑やかで、新しいものがそこにあるような匂いを感じさせる言葉であつた。

秋たけなわとなると、なぜか往還の中を赤ダンブリが何万何十万と群れをなして飛んでいるのだ。まるで途方もない大河の流れのように実にすばらしかった。もしも今、あのような情景が再現されることができるとしたら、物凄いほどの観光客を招くことができるであろうと考えさせられる。

晩秋も終わりを告げる頃には、この往還といわれる道を、秋仕舞いの稲を運ぶ荷車が、金車の軋む音を響かせ、馬の蹄の音とが調和して、まるで今は失われた農村の原風景のようでもあつた。この風景が、大正、昭和と通して戦後二、三年迄は続いていたが、自動車と農薬散布の影響で、環境の変化から再び甦ることはできなかった。

総じて道路のことをケンドと言つたが、ケドが似合う音域もある。其れは山ケドである。現在でも私を始め多くの人は山の道路

とか、山ケンドとかは言わないで、通称山ケドで通っている。あそここの山ケドは車が通れないとか、こちらの山ケドは坂が急で、車では無理だとか、とにかくケドという名が言いやすく、特に山ケドの名は臨場感があって、現場を指しているようで、親しく呼ばれているのである。

今では往還も小路も家がある所ではすべて舗装されていて、ましてや農道までも舗装されるに至ってはケンドとか、ケドとかは違和感があってほとんどの人は道路の言葉として使用しなくなってきた。

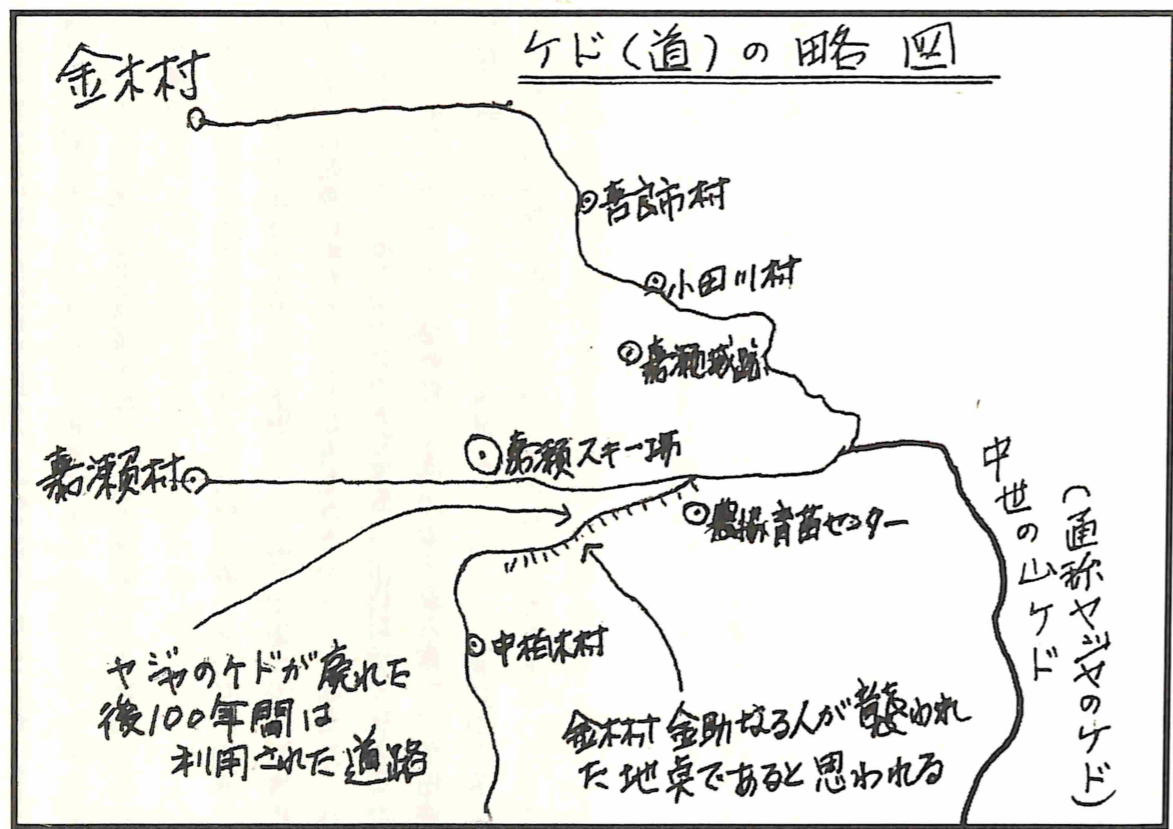
道にはいろいろな道がある。人だけが通る道、車道、鉄道、船や飛行機には目に見えない航路、山には獣道、よく観察すれば昆虫でさえ道が開けている。みんなそれぞれ必要に応じて使われている。道は人以外は別として、人と人が往来し交流するために作り出され、生産段階の手段として道を切り開き、またときとしては敵対に利用されるかして、いろいろな用に供されてきた。物が生産されるにつれて必ず道が開けてくる。と同時に支配する側としては自分の利益に通じる道としてそれを保守し確立して来たとはいえない。

縄文時代人の生き方の歴史の見方を根本的に変えた三内丸山人の、千五百年もの間定住されたと言われる遺構などをみて、金木地区内に住んでいたとされる五千年前の芦野七夕野、金木一号、へび沢、妻ノ神一、二号などの縄文時代中期、後期の人々と、三内丸山人との交流があったか、なかったかは憶測の域をでないけれども、交流があったとみて差し支えないと私はみている。まず第一に考えられるのは、海水の高さである。

今より五、六メートルも海水が高いとすれば、陸地は相当狭められ、三内丸山と金木の間はそれほど難易な道ではないかと思われるからである。遺物、遺構にしても似ていて、それほど違いがあるわけではない。それでは道筋はどうであったか、もちろんその道筋は峰伝いに往来したろうが、山の林相を知らない人からみれば、笹や棘、枯れ木、蔓性の植物に覆われて歩かれるものではないと考えるだろうが、大木になると木の下の雑木や雑草は日光が当たらないために枯死して原生林の中は思ったよりも歩きやすくなるものなのだ。ちなみに山において百年

間のあいだ歩きつづけた道でも灌木地帯ではその道が廃れると数年で荆棘に覆われ、その道の陰さえ発見することが困難になるが、原生林（大木）のもとでは、何百年過ぎても歴然とした道筋が発見されるのである。以上のことを考慮して縄文時代に照らしてみれば、三内丸山と金木の縄文人は兄弟の範囲に入るかもしれないのだ。

そんなに遠い昔ではないが、喜良市鹿子の沢を通って中山山



脈を横断して外ヶ浜（東津軽郡）に出たと言われる内真辺道、そして今泉より蟹田方面に通じる道は、十三（トサ）の覇者安東一族の自家、分家の気脈を通じる道筋で、津軽藩祖が信が、嘉瀬城、八重、佐助を襲撃して滅ぼしたことの一翼を担った道路であったともつたえられている。

中柏木においては藩政以前の道のありかは山伝い、つまり山の峰伝いに歩いたことは間違いないだろう。それで中柏木の古い道路としての「中世のケド」と言われる現在の当地区の保安林と「ヤジャの山」（弥左工門沢という名称の沢全体を含めた呼び名）との峰伝いに歩いた道筋は何百年と時が過ぎても、その道筋は昨日のようにはつきりと確認ができるのである。その道筋は五所川原市飯詰の下外れの山から登り始め、毘沙門山とヤジャの山の峰伝いに歩き、峰の終点から三百米西側にゆるやかな坂を下りて嘉瀬と小田川に行き着く分岐点に達するのである。のちに味噌ヶ沢より毘沙門山の峰に入り、前文の通り、嘉瀬、小田川の村へ辿り着くのである。道というのはどうしても、時の支配者の利便の道具の一つとして取り扱われたふしがあり、浪岡、高橋と為信に攻め落とされるまでの山中の唯一の山ケドであったが、飯詰の高橋落城と相まって室町時代から、戦国時代と何百年も歩かれてきた中柏木山とヤジャの山との間のケドは廃れたが、小田川と嘉瀬への分岐点からの山ケドは、藩政に入ってもまだまだ用をなしていた。

中世の代に活躍した八兵衛屋敷のガンド（一種の追剥）達は

ヤジャのケドまで、八兵衛屋敷から直線距離にして二百米で、実際に行動を起こすとすれば、曲がりくねった山ケドであるため、二千五百米の道なき道を通って物品を奪うように奔走したのである。

ヤジャのケドの方角から八兵衛屋敷は西方にあたり、当時としては所在を確認することが困難で、大通りであったヤジャのケドからは死角にあたっていたかもしれない。

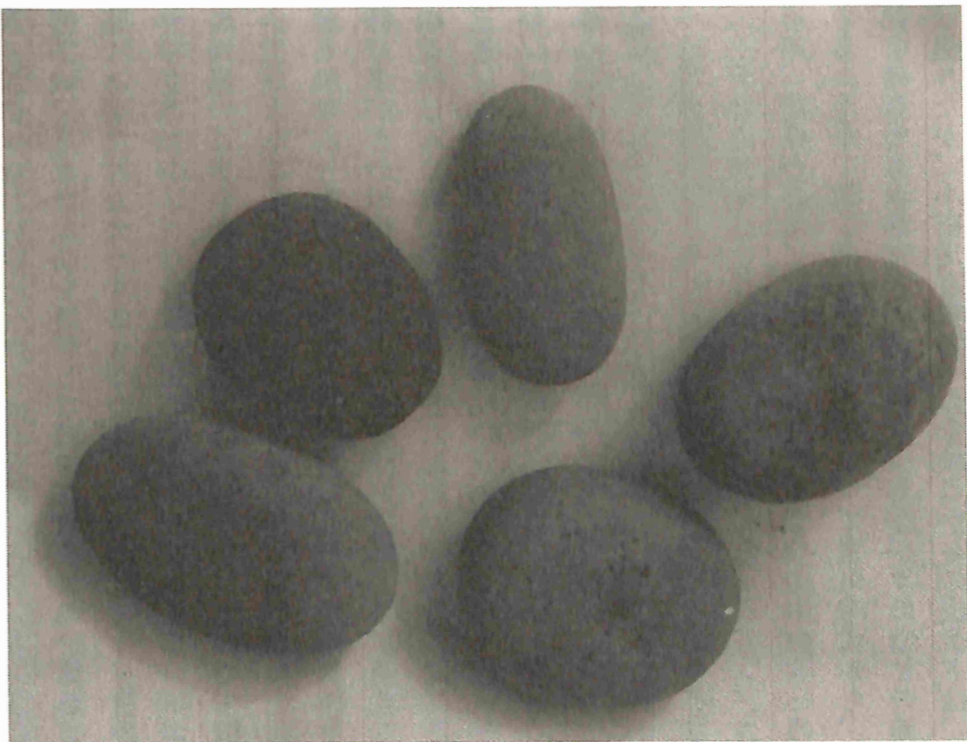
しかし、いかにガンドがいたとしても、追剥だけで生計をたてているわけではなく、屋敷跡の土器の散在からみて、水田耕作は無理としても、畑作は可能であったろうし、面積からみても、五、六戸の群をなしていたと思われる。ガンドがいたとて生活物資に窮すると徒党を組んで襲撃したのである。

昭和五十二年二月六日から降り続いた雪は、青森市で一九〇センチ、五所川原市で一五〇センチとなり、中柏木に於いては二月十日、朝三時から、ちょうど昼十二時迄降った雪は一〇〇センチで、まさしく豪雪であった。金木町本町は一〇〇センチにはならなかったが、この豪雪の対策助成援助として、金木町に国からブルドーザー一台が寄与された。そのブルドーザーの仕事の一翼を担う作業として、中柏木の山の保安林の中の各沢の峰を自動車を通れる作業道を造ったのである。

私はお盆過ぎに自分の持ち山を見回ろうとして、一の沢であるウド沢と北の沢が交差してなおかつヤジャの山との交点あたりで珍しい石を拾ったことがある。石そのものが珍しいのではなく、有る場所ではないところにあつたからである。言ってみれば中世のケドであるヤジャのケド付近で、手の中に入れる位の平べったく丸くてきれいな石で五個ほど拾い集めたが、ブルドーザーで掻き回しての五個だから他にもつとあつたのかもしれないが、とにかく付近からはまちがっても出土する石ではなかった。その石はなにかの標すで、公標か私標、それとも行き倒れになった人の墓標の印であつたかもしれない。また何らかの分岐点を示し大切な指標石に使用したのかもしれない。と、いろいろな見方が成り立つわけである。

道の働きの用は始めは受動的でも、利用しているうちに能動的になってくる。南朝の影響を強く受けていたといわれる浪岡城、飯詰の高樞城、そして中柏木城（城というよりは山館で昭和二十五年頃までは堀跡が残っていた）八重、左助が守っていた、今は小田川城といっているが嘉瀬城（私は嘉瀬村の区有地であり、嘉瀬のお城山と永年呼称されてきたので嘉瀬城とおもっている。）そして嘉瀬の西館と政略上繋がっていたのだが、為信ないしは為信の手下によつて、落城の憂き目に遭つたが中世のヤジャのケドは攻守共に大きな役割を果たしたのである。

このヤジャのケドも明治も終りから大正にかけてヤジャの全体の杉の植林のため新しい馬車道が通つたことによつて、中世のケド跡も半分以上は組み込まれ、それが新しいヤジャのケド



ヤジャの山からひろった石

と名付けられるようになった。

植林された杉は昭和三十年代に伐りだされたが、その後手入れされることなく二十年ぐらいで棘やその他の雑木の繁茂によつて完全に道路としての用をなさなくなり人も歩くことさえできなくなったのである。

ところが平成十年に森林整備法という新しい法律が生まれ、その法律にのつとつて中柏木の山である保安林の中の各沢に堰堤を築き、各峰には砂利敷の道路が平成十四年に完成された。それにつれて五所川原市共栄部落から嘉瀬スキー場経由、嘉瀬迄の幹線道路がすっかり完成し、大型車も通れるようになった。車が交差できるりっぱなヤマケドであつてもやはりヤジャのケドである。

藩政時代に入って葦原の湿原地帯であつた不毛の地帯でも開墾されるにつれて水田が現れてきた。寛永年間（一六二四～一六四三）で西北の中心地、五所川原でさえ、たったの十九軒の小部落に過ぎなかつたという。

原野の開拓が進み、とりわけ水田の開墾が著しく、水稻の生育に必要な水の確保が絶対的に必要になり、水源としての溜池の築堤が行われるようになる。堤はもちろん土の盛土で水漏れなく締まる土でこの築堤が七ツ館以北の主要な道路の役割を果たしてくるのである。長橋溜池や、金山溜池、境ノ沢溜池の土堤が完成して、その土堤の上を道路として利用し、いわゆる下



位置図

①-⑩道路の所在

ノ切道路と称されるようになった。下ノ切道路の始めは飯詰から上のぼりのことを指したらしいが、飯詰以北(二間道路)寛文(一六六一)以降に着手したのは津軽四代藩主信政が、はじめ江戸神田の邸から津軽へ帰ってからである。信政は生まれは津軽だが育ちは江戸

これまでの四十八丁(五二四一、六メートル)をもって、一里としたが、この測量の時点から三十六丁(三九三二、二メートル)をもつて一里と定め測量を実施したのである。十丁抗、一里塚を設定したのもこの時で、だれにでも分かる道路の距離の目安をつくったのである。ちなみに一里塚は、慶長九年(一六〇四)幕府の命令によって、津軽、南部とも創られるようになったのだが、飯詰以北は幕命から約九十年も遅れてやっと設置されるようになったのである。

②明治・大正の時代に開削された車馬道范沢の奥



①中世のケド(道路) 釜范の奥

で、十六歳のとき津軽に帰って来たのだが、歴代藩主のうちでも名君といわれた殿様であった。

津軽領内の開墾事業は順調に進捗し、飯詰以北も着々と開墾が進み、元禄六癸酉年(一六九三)四月から塩崎次郎左工門、館山善左工門を道路御改奉行として測量せしめた。

この道路の幅は当初の計画通り二間(三、六四メートル)道路で現在でもその痕

